

『サイラス・マーナー』における「若さ」と 社会構造

橋本，亮平

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

88

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

7

(発行年 / Year)

2022-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025540>

『サイラス・マーナー』における「若さ」と社会構造

人文科学研究科 英文学専攻
修士課程 1 年 橋本 亮平

0. はじめに

‘Yes, my dear, yes,’ said Mr Lammeter; ‘one feels that as one gets older. Things look dim to old folks; they’d need have some young eyes about ’em, to let ’em know the world’s the same as it used to be.’ (242)

1861 年に出版されたジョージ・エリオット (George Eliot) の『サイラス・マーナー』(*Silas Marner*) の結末で、年老いたラミター氏 (Mr Lammeter) は、「世界が昔と同じものである」ことを認識するためには、「若い眼」が必要である、と語る。ラミター氏のこの発言は、物語の展開を教訓的に総括した言葉である。作品のあらすじを簡単に辿ってみよう。主人公であるサイラス・マーナー (Silas Marner) はもともとランタン・ヤード (Lantern Yard) の教会で幸福な生活を送っていた。しかし、親友ウィリアム (William) と婚約者サラ (Sarah) に裏切られたことによって、マーナーは「神と人間に対する信頼の揺らぎ」(61) を覚える。彼はランタン・ヤードを去り、ラヴィロウ (Raveloe) というゆかりのない土地でリネン織工として再出発する。故郷と似つかぬラヴィロウの様子は、マーナーに過去と現在が断絶しているような感覚を与える。彼は孤独で禁欲的な生活を送っていたが、移住から 15 年が経った年に二つの重要な出来事が生じる。一つ目はマーナーが何よりも大事にしていたお金が盗まれたこと、二つ目はその喪失を埋め合わせるように、エピー (Eppie) という子供が彼の家に迷い込んで来たことである。マーナーは父親代わりとなり、エピーを育て始める。引用したラミター氏の発言は、マーナーが若きエピーの「眼」を通じてランタン・ヤードとラヴィロウの間の断絶をつなぎ合わせたことをあらわしている。ランタン・ヤードとラヴィロウは、切り離された異なる世界ではなく、通じ合った「同じ」世界なのである。

しかし、このラミター氏の発言はより大きなコンテクストを含意している。『サイラス・マーナー』は第一部、第二部に分かれた作品であるが、その間に約 16 年が経過している。読者はキャラクターたちの成長や老いだけでなく、産業や農業のあり方が変わったことに気が付く。社会構造の変化が長年ラヴィロウに住んでいる村人たちにも時間的な断絶を生んでおり、それをつなぎ合わせるために「若い眼」の必要性が生じていたのである。

本論では、ラヴィロウの社会構造と「若さ」のイメージの対応関係について考察する。Robert H. Dunham はワーズワース (William Wordsworth) の子供観が『サイラス・マーナー』に影響を及ぼしていると考え、エピーが古い習慣や因習から抜け出す媒体として機能していると指摘している (Dunham 658)。Dunham の論は子供としてのエピーに関する考察に終始しているが、ここでは「若さ」というより広いイメージに注目し、ラヴィロウという社会との関係性について論じる。

Chao-Fang Chen はマーナーが年を重ねることと彼の職業 (機織り) が衰退していく過程を結びつけて論じている (37)。本論ではラヴィロウの「大人」たちをラヴィロウの社会構造 (彼らの仕事を含み) と結び付け、その対応関係について考察をくわえる。

1. フランコ・モレッティの Bildungsroman (教養小説) 論

「若さ」という象徴は、ジョージ・エリオットの時代の文学と深く関わっている。フランコ・モレッティ (Franco Moretti) は、Bildungsroman (教養小説) が近代性の象徴形式として成立し、その中心に「若さ」という記号を

据えたと述べている。「若さ」が選ばれたのは、資本主義の不安定な力がもたらす社会的・空間的な「可変性」と、未来に強い希望や不安を抱く「内面性」を表現するのに適した記号だったからである (Moretti 4-5)。

二重革命（フランス革命と産業革命）以後、ヨーロッパはモダニティに突入していく (Moretti 5) が、身分の流動性や相反する価値観（都市と農村、禁欲と商業など）の相克によって社会が不安定なものに変わる。社会の安定性と「若さ」のイメージの関係についてモレッティは以下のように語っている。

[...]the more a society is and perceives itself as a system still unstable and precariously legitimized, the fuller and stronger the image of youth. Youth acts as a sort of *symbolic concentrate* of the uncertainties and tensions of an entire cultural system, and the hero's growth becomes the narrative convention or *fictio* that permits the exploration of conflicting values. (Moretti 185)

モレッティはモダニティの到来によって社会が不安定になればなるほど、「若さ」のイメージが「強化」されることを指摘している。なぜなら「若さ」はモダニティの「文化システム全体」の「不確実性と緊張」を集約した象徴の役割を果たすポテンシャルを持っているからである。若き主人公が相反する価値の探求を通じて成長する Bildungsroman は、モダニティの「不確実性と緊張」を象徴的なレベルにおいて解消する力を持っている。しかし、ヨーロッパの中で最も安定した社会構造を持っていたイギリスにおいて、事情は少し異なっている。

But English society in the eighteenth and nineteenth centuries, despite the Industrial Revolution and Chartism, is by far the most stable in Europe, and proud to be so. Its value-system is decidedly stable, and stability itself is seen as a value, and as one of the strongest ones at that. In this framework, the notion of social mobility cannot evoke the certainly ambiguous but fascinating and vital figures of Julien Sorel, Rastignac, or Bel-Ami. (Moretti 185)

イギリスは「産業革命」や「チャーティズム」を経た後も安定した社会構造を維持していた。安定した社会構造とは、「価値体系が安定」していて、「伝統と進歩」が結びついているような社会を意味している (Moretti 185)。その結果、19 世紀のイギリス小説には社会的な「可変性」から生じるようなタイプのキャラクター（スタンダーの『赤と黒』(1830)のジュリアン・ソレル、バルザックの『ゴリオ爺さん』(1835)のラスティニャック）が存在しないのである。

ヨーロッパ大陸で「若さ」の価値が高められていた一方で、同時期のイギリスにおいて「若さ」は成熟に従属するものであると捉えられていた。1749 年に出版されたヘンリー・フィールディング (Henry Fielding) の『トム・ジョウンズ』(Tom Jones) から 1850 年に出版されたチャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の『デイヴィッド・コパフィールド』(David Copperfield) にいたるまで「若さ」は「間違い」を犯す未熟な存在として扱われている (Moretti 184)。若き主人公はさまざまな経験を通じて「若さ」を卒業し、「大人」になることで社会との統合（地位の確立、結婚）を果たす主体として描かれているのだ。

では『サイラス・マーナー』の「若さ」も『トム・ジョウンズ』、『デイヴィッド・コパフィールド』の伝統に従うものなのだろうか。モレッティはジョージ・エリオットの後期の作品（『ミドルマーチ』(Middlemarch, 1871-2)、『急進主義者フィーリクス・ホルト』(Felix Holt, the Radical, 1866)、『ダニエル・デロンダ』(Daniel Deronda, 1876)) を取り上げ、エリオットをイギリス文学史の特異点として論じている¹が、ここでは『サイラ

¹ モレッティはエリオットの後期作品において、社会の影響力・支配力の高まりと反比例するかたちで「個人性の犠牲」(Moretti 227)が生じていると論じる。フィーリクスやダニエルはもはや社会という「大きな世界」(Moretti 226)に関心を持っておらず、社会との壁を作り上げ、小さくて古い共同体に身を置くことを選ぶ。彼らはその小さな共同体で行われる「浄化」、つまり小さな共同体との統合に価値を見出している。しかし、モレッティはこの「おとぎ話」的な「報酬」は、結局は「個人性の犠牲」の反転でしかないと主張している (Moretti 227)。

ス・マーナー』を別の角度から論じてみたい。

『サイラス・マーナー』の第一部のラヴィロウは、古典的な Bildungsroman で扱われる社会と同じように比較的安定した共同体である。したがって社会を代表する「大人」たちが権力を握っており、若者は未熟な存在として従属させられている。ゴドフリーの結婚のプロットは、彼が「若さ」を卒業し、社会と調和を実現するプロセスとして読むことができる。

しかし、エリオットはフィールディングやディケンズよりも動的に社会を捉えていた。ゴドフリーが結婚によって結びついたラヴィロウの社会は、第二部で「破滅的な時代」(211)を迎えている。ゴドフリーが代表する「大人」の権力が弱まっているのと対照的に、エピーとエアロン(Aaron)といった若者の姿が生き生きと描かれるようになる。モレッティの論の通り、社会的な動揺によって「若さ」の価値が高められているのである。以下、第一部・第二部における「若さ」を対照的に論じる。

2. 『サイラス・マーナー』第一部における「若さ」

(1)メイシーと「若さ」

第一部におけるラヴィロウは、社会変化の兆しをわずかに孕んでいるものの、安定したゲマインシャフト的な農村として読者に提示されている(53)。様々な階級、職業の「大人」たちがラヴィロウを支えていることが、レインボウ亭(Rainbow)での議論やレッド・ハウス(Red House)のパーティの描写によって示される。

イギリスの古典的 Bildungsroman と同様に、第一部の「若さ」は未熟なものとして「大人」たちに従属させられている。仕立て屋と教区の執事を兼任しているメイシー(Macey)は「若さ」の対立イメージ(「大人」、「老い」など)を象徴するマイナーキャラクターであるが、彼はトゥーキー(Tookey)という若者を従えている。

Mr Macey, tailor and parish-clerk, the latter of which functions rheumatism had of late obliged him to share with a small-featured young man who sat opposite him, held his white head on one side, and twirled his thumbs with an air of complacency, slightly seasoned with criticism. (97)

第一部ですでに70歳を迎えているメイシーは「リウマチ」を患っているため、教区の仕事の一部をトゥーキーという若者に譲っている。しかし、トゥーキーはラヴィロウで人気がない(98)。第6章のレインボウ亭の場面では、メイシーや車大工のウインスロップ(Ben Winthrop)からトゥーキーは猛烈にからわれている。むきになったトゥーキーは「大人」たちに反論をするが、メイシーはその様子を「若者の図々しさ」(98)であると批判的に受け止める。議論においてトゥーキーの肩を持つ者はおらず、レインボウ亭の仲間たちは皆メイシーの味方である。その議論に参加していなかった蹄鉄工でさえ“had listened with a divided desire for Tookey's defeat”(99)と、トゥーキーが言い負かされることを望んでいる。

ナラティブ構造上でもメイシーは若者たちの声を圧迫する存在である。たとえばマーナーのお金の行方についてラヴィロウの人々が意見を交わす場面において、トゥーキーの語りはメイシーによって即座に打ち消される。

‘As if,’ concluded Mr Tookey—‘as if there was nothing but what could be made out by justices and constables.’ ‘Now, don’t you be for overshooting the mark, Tookey,’ said Mr Macey, nodding his head aside admonishingly. ‘That’s what you’re allays at; if I throw a stone and hit, you think there’s summat better than hitting, and you try to throw a stone beyond. What I said was against the tinder-box: I said nothing against justices and constables, for they’re o’ King George’s making, and it ’ud be ill-becoming a man in a parish office to fly out again’ King George.’ (112-113)

トゥーキーはメイシーの説に従うような意見を語ったにもかかわらず、彼の言葉はすぐに打ち消されてしまう。

若きトゥーキーの発言は絶えずメイシーから圧迫されており、彼のメイシーへの従属が印象づけられるのである。

「若さ」を圧迫するメイシーの語りは、トゥーキー以外にも適用される。メイシーはマーナーに次いで可動域が広い、物語の中を動き回るキャラクターである。彼はレインボウ亭だけではなく、レッド・ハウスのパーティにも参加しているし、マーナーの家も訪れている。メイシーはそれぞれの場所で「若さ」を批評する。彼の「散漫な演説」(132)が各場面で展開されることによってナラティブ上のスペースが占有され、「若さ」は圧迫を受けるのである。

たとえば、お金を盗まれたマーナーをメイシーが慰めようとする場面では、メイシーはやはり「散漫な演説」を長々と展開している(132-3)。対照的にマーナーはほとんど言葉を発さない。マーナーの言葉が発せられるのは、メイシーが彼に感謝や返事を求める時だけである(132)。

メイシーはレッド・ハウスのパーティにも“privileged villagers” (158)として参加しており、身分の高い人々のダンスを車大工ウィンスロップとともに批評する。ゴドフリーとナンシーのダンスは若者たちの視点からではなく、メイシーとウィンスロップの語りによって提示されるのである。

‘Pretty well down’ard, but a bit too round i’ the shoulder-blades. And as for them coats as he gets from the Flitton tailor, they’re a poor cut to pay double money for.’[...]‘Tchuh!’ said Mr Macey, provoked to increased severity, ‘he isn’t come to his right colour yet: he’s partly like a slack-baked pie. And I doubt he’s got a soft place in his head, else why should he be turned round the finger by that offal Dunsey as nobody’s seen o’ late, and let him kill that fine hunting hoss as was the talk o’ the country?’ (160)

メイシーはゴドフリーのダンスを見て、彼が「生焼けのパイ」のようであり、「頭が弱い」ところがあると評する。メイシーの価値観に照らし合わせると、ゴドフリーは「若さ」の段階に留まっており、未だ「本当の姿」＝「大人」になっていないのである。

第二部では多くの「大人」のキャラクターたちが退場する中、マイナーキャラクターであるメイシーは「86歳」(200)まで長生きをし、少しだけ舞台に顔を覗かせている。第二部のメイシーの描写は、「大人」の力の衰えを顕著にあらわしている。彼は“never seen except in his chimney-corner or sitting in the sunshine at his door-sill”(200)と「炉隅」や「戸口のひなた」で一日を過ごしており、縦横無尽に動き回る存在ではなくなっている。エピーとエアロンの結婚式でもメイシーは控えめな「散漫な演説」を「ひどく震える声」(243)で語るのみである。最後に彼は、トゥーキーが自分の仕事を長いこと代わりに勤めている事実を言い残して物語から退場する(243)。第一部と第二部におけるメイシーの変化が、彼が象徴していた「大人」の権力が弱まっており、反対に彼が圧迫していた「若さ」の力が強まっていることを示しているのである。

(2)ゴドフリーの「若さ」

ラヴィロウの地主の息子であるゴドフリー・カス(Godfrey Cass)は、「若さ」を持った存在として描かれている。彼は自分と同じく上流階級のナンシー・ラミター(Nancy Lammeter)に想いを寄せているが、自身の「若い頃の過ち」(79)が足枷となり、恋路に踏み込むことができていない。ゴドフリーの「過ち」とは、「劣情」と「幻惑」(80)によって下層階級のモリー(Molly)と秘密結婚をしてしまったことである。後にサイラスに育てられるエピーは、ゴドフリーとモリーの子供である。

ゴドフリーの弟ダンスダン(Dunstan)は兄の秘密結婚のことを知っている。彼はその弱みを利用し、兄を脅迫し不当にお金を受け取っている。彼はのちにマーナーの貯め込んだお金を盗むという事件も引き起こす。語り手はダンスダンの不道德さを「若気の放蕩」(72)であると語っている。

第一部のゴドフリーに関するプロットは、イギリスの古典的 Bildungsroman 的なプロセスを辿っている。ゴドフリーは最初未熟な若者として扱われるが、結婚を通じて「大人」になり、ラヴィロウという社会との調和

を実現しているのである。

まずゴドフリーの「若さ」は次のような場面で強調されている。マーナーのお金を盗んだ犯人について意見が交わされる場面で、ラヴィロウの村民たちは空想をたくましくして「邪悪な眼つき」をした行商人というイメージを作り上げる。しかし、ゴドフリーは村民が作り上げた犯人像を「ナンセンス」だと退ける。村民たちに反対するようなゴドフリーの意見は、彼が上流階級の若者であるにもかかわらず、「若者のいい加減な話」だとみなされ相手にされない。彼の声は、スネル、メイシー、その他積極的に証言をする準備ができているラヴィロウの「大人」たちの声によってかき消されている(115)。

またゴドフリーの「若さ」は、彼の父親であるスクワイアー・カス(Squire Cass)との関係において強調される。ゴドフリーは本来父に渡すべきだったお金(ファウラー[Fowler]から取り立てた百ポンド)を、自分の弱みを握っているダンスダンに渡してしまう。また名馬ワイルドファイアー(Wildfire)をダンスダンに譲ってしまったことで、結果的に名馬を死なせてしまう。ゴドフリーはこのような「若者の愚行」(124)を父に告白することについて以下のように思い悩んでいる。

The old Squire was an implacable man:[...]Like many violent and implacable men, he allowed evils to grow under favour of his own heedlessness, till they pressed upon him with exasperating force, and then he turned round with fierce severity and became unrelentingly hard. This was his system with his tenants [...](119)

老スクワイアー・カスは名の通り、ラヴィロウで有数の地主である。ゴドフリーは、父の「借地人」に対する厳しい対応を知っており、その態度が自分にも適応されることに恐れを抱いている。ゴドフリーの告白を聞いたスクワイアー・カスが“‘I shall let you know I’m master’”(126)と怒りをぶつけることから分かるように、彼らの関係は「主人」と「借地人」のような側面を持っており、「若さ」が「大人」に強く従属させられていることが示されている。

しかし、スクワイアー・カスは一方で社会変化の兆しを敏感に感じ取っており、自分の土地や地位の存続について不安を抱いている。

‘[...]And that fool Kimble says the newspaper’s talking about peace. Why, the country wouldn’t have a leg to stand on. Prices ’ud run down like a jack, and I should never get my arrears, not if I sold all the fellows up[...]’(121-2)

スクワイアー・カスは医者であるキンブル(Kimble)伝いにナポレオン戦争が終結に向かっていることを聞く。戦争の終結は彼のような地主階級の生活に悪い影響を及ぼす。なぜなら、国に平和が訪れることで、今まで高騰していた穀物の価格が大きく下落するからだ。“farm badly quite at their ease”(54)というラヴィロウの農業のやり方では、現在の生活を維持することが難しくなる。

スクワイアー・カスはこの変化をおぼろげながら察知しており、息子に向かって“‘It’ll be all the worse for you, you know—you’d need try and help me keep things together.’”(124)と自分の「手助け」をするように命じる(124)。彼の言う「手助け」は、ゴドフリーが「若者の愚行」を卒業し、ナンシーと結婚することによって「大人」の仲間入りをすることである。古典的 Bildungsroman と同様に、結婚はカス家がラヴィロウの社会とより強固に結びつくための手段なのである。実際、ゴドフリーはナンシーと結婚したことによって、ラミター家の親戚であるオズグッド(Osgood)家と土地を交換し、酪農を始めることができている(212)。レッド・ハウスのパーティでスクワイアー・カスが若者たちの結婚を強引に推し進めようとする(155)のは、社会構造の変化がカス家に与える動揺を、息子の結婚によって解消できると考えているからなのである。

以上見てきたように、第一部のラヴィロウは社会が安定しており、「若さ」が「大人」に従属するかたちで提示されている。未熟な若者たちは「若者の愚行」を卒業し、結婚を通じて「大人」になるという成長を期待さ

れる存在である。しかし、エリオットは物語を第一部で終わらせず、第二部において社会構造と「若さ」が変容している様子を描いているのだ。

3. 第二部における「若さ」

ラミター氏とゴドフリーが「破滅的な時代」(211)について話し合っていることから分かるように、第二部のラヴィロウの社会構造は大きく変化している。「救貧税」(211)の増加、農場主たちが恩恵を受けていた“glorious war-time”(71)の終結、機織りの不景気(200)といった社会的な要因が、ラヴィロウの社会構造に動揺を与えていたのである。

『サイラス・マーナー』の第二部は日曜日の教会から始まる。まず私たちが目にするのは年を取ったカス夫妻（ゴドフリーとナンシー）である。語り手は彼らが「若さ」を失ったことを念入りに描写する(195)。スクワイアー・カスは既に亡くなっている。スクワイアー（地主）という称号がゴドフリーに引き継がれていないことも、ラヴィロウの社会構造の変容を伝える証左である(196)。

カス夫妻と対照をなすように、新たな若者、エビーとエアロンが登場する。彼らの「若さ」は第一部の「若さ」とは異なっている。教会の帰り、エビーはマーナーに向かって「小さな庭」(197)が欲しいと言い出す。そこに若きエアロンが登場し、“I can dig it for you, Master Marner”(197)とマーナーの「代わり」に庭づくりを請け負うことを宣言する。エアロンはエビーに好意を抱いているため、彼女の庭づくりを手伝いたいと考えているのである。エアロンは続けて“Master Marner[...]won't do me the unkindness to anyways take it out o' my hands.”(198)と、仕事を任せてくれるようマーナーに向けて念を押している。このエアロンとマーナーの関係を、第一部のトゥーキーとメイシーの関係と比較すれば、その差は歴然である。彼らは仕事を共有する「大人」と若者という関係性においては共通しているが、エアロンの場合、「大人」たちからの圧迫を受けておらず、むしろ積極的に「大人」の「代わり」を担おうとする主体なのである。“‘He[...]had got a deal of gardening work, now Mr Mott's given up; and he goes twice a-week regular to Mr Cass's, and once to Mr Osgood's, and they're going to take him on at the Rectory.’”(208)というエビーのエアロン評からも、エアロンがトゥーキーのように「大人」から仕事を分けてもらっているのではなく、既に独立した存在であることを示している。

「若さ」の力が強まっていることは、カス夫妻に関するプロットでもあらわれている。これまで見てきたように、第一部のラヴィロウは安定した社会共同体であった。若きゴドフリーは結婚によってラヴィロウとより深く結びついている。しかし、ゴドフリーとナンシーが結婚によって作り上げた社会とのつながりは、社会自体が変化する場合、徐々にほどけていくものではないだろうか。ゴドフリーはカス家にとって「破滅的な時代」が訪れていることに気が付いている。また、少なくとも 1861 年にこの物語を書いたエリオットは、ゴドフリーのような地主階級が没落していく歴史的事実を知っているのである。

ゴドフリーの社会変化に対する懸念は、子供がいない「欠如」(215)として問題化されている。ゴドフリーにとって子供は「先を見せてくれるもの」(216)であり、それなくしては彼の地位や土地といったもの「すべてが空虚に見える」(219)のである。ちょうどマーナーにとってエビーが思考を未来に向けてくれる「変化と希望」(184)が混じった対象であったように、ゴドフリーは「破滅的な時代」を乗り越えるために「若さ」を求めているのだ。カス夫妻が若きエビーを養子に取ろうとする行為には、このような背景を読み取ることができるのである。

カス夫妻はエビーを養子に迎え入れる交渉をするためにマーナーの家に向かう。ゴドフリーは当初、この交渉を「簡単」(228)なものだと思いついてはいるが、二度にわたるエビーの拒絶によってそれは破綻する。この議論の最終的な決定権を握っているのは若きエビーであり、「大人」は彼女の意見に従うほかないのである。ゴドフリーは娘が自分を「批判」できるくらいに「成長」していることに「困惑」する(233)。この困惑は、ゴドフリーが求めていた「若さ」の力が思っていたよりも成長しており、対照的に自分を含む「大人」の権力が弱まっていることに気が付く場面なのである。交渉に失敗し家に戻ったゴドフリーが“‘That's ended!’”(235)と言うのは、単に養子を迎えることに失敗したというだけではなく、「先を見せてくれる」ものがなくなったという彼

の絶望もあらわしているのではないだろうか。

4. 『サイラス・マーナー』における「若さ」

『サイラス・マーナー』で描かれている2つの「若さ」は、「若さ」の本質が変わったことを意味しているのではなく、社会構造の変化に応じてその扱われ方/語られ方が変化したことをあらわしている。エリオットが「若さ」自体に与えている定義は、作品の冒頭に引用されているワーズワース(47)流のものである。つまり、「若さ」は人の考えを「未来に訪れる新しいものの方に運ぶ」、「変化と希望」が混じった存在なのである(184)。

カス夫妻の結婚が“glorious war-time”の終結によって脅かされていたように、結末に描かれるエピーとエアロンの結婚も近い将来、産業化・工業化の脅威にさらされることは間違いない。この二組の相違点は、前者が上流階級間の結婚であるのに対して、後者が労働階級間の結婚だという点にある。この対照性は、エリオットが労働者階級の「若さ」に「希望」を見出していたことをあらわしているのではないだろうか。

物語に教訓性を与えているドリー・ウィンスロップ(Dolly Winthrop)の素朴な哲学は、このような解釈を許すものである。第21章において、三十年ぶりにランタン・ヤードを訪れたマーナーが町の工業化に対して感じた困惑をドリーに打ち明ける。マーナーはこの社会変化によって生じた断絶に直面し、自分には何も「分からない」(240-1)と語る。戸惑うマーナーに対して、ドリーは以下のように語る。

‘Well, yes, Master Marner,’ said Dolly, who sat with a placid listening face, now bordered by grey hairs; ‘I doubt it may. It’s the will o’ Them above as a many things should be dark to us; but there’s some things as I’ve never felt i’ the dark about, and they’re mostly what comes i’ the day’s work. You were hard done by that once, Master Marner, and it seems as you’ll never know the rights of it; but that doesn’t hinder there *being* a rights, Master Marner, for all it’s dark to you and me.’(241)

ドリーは、人間の限られた力では、激動する社会によってつくられる断絶を理解することは到底できない、と語る。それでも人間には断絶について理解する道筋が用意されている。その理解は、「日々の仕事」から生じるものだと言っている。この素朴な哲学は、マーナーが“‘I should ha’ been bad off without my work: it was what I held by when everything else was gone from me.’”(227-8)と、すべてを失くした時も「仕事」だけは残っていたと語っていた事実とも響き合っている。実際、マーナーは唯一残されていた「日々の仕事」を続けていく中で、エピーと出会い、ランタン・ヤードとラヴィロウの断絶をつなぎあわせているのだ。

エピーが上流階級に身を置く実の親ではなく、育ての親マーナーを選び、労働者であるエアロンと結婚するのは、エリオットが「日々の仕事」から得られるものに、社会変化による断絶を解消する「希望」を見出していたからではないだろうか。

参考・引用文献

Chen, Chao-Fang. “The Aging Experience of Silas Marner: *Silas Marner* as *Volledungsroman*.” *George Eliot - George Henry Lewes Studies*, no. 46/47, 2004, pp. 36–52.

Dunham, Robert H. “*Silas Marner* and the Wordsworthian Child.” *Studies in English Literature, 1500-1900*, vol. 16, no. 4, 1976, pp. 645–59.

Eliot, George. *Silas Marner: The Weaver of Raveloe*, edited by Q. D. Leavis, Penguin, 1985.

Moretti, Franco. *The Way of The World: The Bildungsroman in European Culture*, London: Verso, 1987.